



# 羅針盤

主幹 荒木 光弥

## ASEANは日本の生命線 新たな関係強化が求められる

### 順風満帆でない時代

謹賀新年。昨年11月9日に「日本ASEAN（東南アジア諸国連合）友好協力50周年記念」と題する国際協力機構（JICA）主催のシンポジウムが開催された。

第1パネルディスカッションでは「ASEANとJICA：これまでの50年、次の50年」、第2パネルディスカッションでは「ASEANと日本：2073年から今を振り返る」と題して議論された。50年を振り返り、これからの50年を展望し、新しいASEANと日本との関係を探求することは、日本の安全保障にとって最も大切な課題だと言える。ただ、振り返ってみると、ASEANと日本の関係は、決して順風満帆ではなかった。

筆者は、1960年代末から戦争中のベトナム（サイゴン）、そしてタイのバンコクへ、たびたび取材に出かけた。滞在日数はバンコクが一番長く、それゆえに多くの事件に遭遇した。その記憶は今で

も鮮明である。1972年11月頃から、タイ学生たちによる日本商品不買運動を契機に、日・タイ貿易不均衡（日本の大幅輸出超過）に抗議する学生運動が始まる。そして、その流れは翌年には、タノム軍事政権打倒へと発展する。

タイの学生たちは次のように訴えていた。「今日、タイは政治、経済上の脅威にさらされている。政治的脅威については、内外の監視があるので、さほどの不安はない。問題は経済的脅威である。これは商品と文化の形をとってわれわれを襲い、日常生活の中にその存在を徐々に広げてゆく。タイが年間100億バツの貿易赤字を抱えているという事実からしても経済的脅威の重大性が認められよう」。実際の貿易赤字の半分（50億バツ以上）は日本によるものであった。

当時、日本では、政府、経団連が一緒になって対策を練ったが、貿易赤字を肩代わりできる政府開発援助（ODA）の役割を重視するようになった。同じように問題

意識はインドネシアの学生たちにも伝わっていたので、田中首相のインドネシア訪問では、学生たちの反対デモにより空港で立ち往生するという事件へと発展した。田中首相にしてみれば、懸案の日中国交正常化に大きな道をつくって乗り込んでASEAN歴訪の第一歩であるインドネシアで挫折してしまった。これはまさに東南アジアへの首相外交の初めての挫折と言っても過言ではない。

### 挫折を乗り越えた政治力

その中で挫折を乗り越えようとしたのが、1977年の「福田ドクトリン」である。当時「ニクソン・ドクトリン」にならって「福田ドクトリン」と唱えたとも言われたが、その中身は10億ドルを投入した「ASEAN工業化」を支援するもので、「ニクソン・ドクトリン」よりも中身が濃く、ASEANの工業化を具体的に支援する実現性の高いものであった。例えばインドネシア、マレーシア、タイはアンモニア

特集

# 国際協力の新地平

## フロンランナー8人の挑戦



YOOFIN代表の関根賢人さん。ガーナで、子どもたちのタンパク質不足を補うために  
孤児院に卵を提供している=22~23ページ参照



技術革新や働き方の多様化、人口動態の変化など目まぐるしいスピードで変わる世界。そして、米中対立の激化、紛争の長期化など世界の分断も進む。歴史の転換点を迎えている今、どのようにグローバル化を保ち、発展させていくべきなのだろうか。新しいアプローチや柔軟な発想で、従来の国際協力に風穴を開けようと挑む20代、30代のフロントランナーを紹介する。



● **田才 諒哉**さん

国連WFP ラオス事務所 Programme Policy Officer

● **中村 彩乃**さん

デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー 合同会社 国際開発コンサルタント

● **田中 祐太郎**さん

JICAガバナンス・平和構築部 計画・課題戦略推進課 職員

● **永田 賢**さん

サグリ株式会社 インド法人 最高戦略責任者

● **関根 賢人**さん

YOOFIN Ltd. 代表

● **長坂 優子**さん

特定非営利活動法人 日本リザルツ 職員

● **渡部 カンコロongo 清花**さん / **成田 茉央**さん

特定非営利活動法人 WELgee 代表理事 / スタッフ

※本文では敬称略

# 泥臭くても現場に通い続ける

## 膨らむニーズに追いつくために

これまで民間企業、NGO、JICA海外協力隊、国際機関などさまざまな立場で国際協力の仕事を経験し、現在はJPOとして国連世界食糧計画(WFP)のラオス事務所で栄養不良の課題に取り組む田才諒哉さん。WFPだからこそできることや国際協力への思いを語ってもらった。

### 世界最大の人道支援機関で働く

現在は国連WFPのラオス事務所でProgramme Policy Officerとして働いている。飢餓を取り巻く世界の状況は近年悪化しており、世界最大の人道支援機関である国連WFPの活動や資金もニーズに追いついていない現状だ。そんな状況だが、何とか課題に追いつくことができる組織で働いていないと、より世界に置いて行かれてしまうと感じ、WFPで働くことを選んだ。今は、膨らむ世界のニーズに追いつくために、面的で規模の大きい支援を届けられる機関で経験を積みたいという思いが強い。

ラオスは現在、栄養不良が深刻な問題だ。5歳未満の子どもの3人に一人が低身長で、子どもや女性を中心に微量栄養素欠乏の人が多い。農業を通じた栄養改善や現金給付で、栄養価の高い食べ物を

購入したり野菜や家畜を育てるための投資に使ってもらったりという支援などを実施している。メインで関わっているプロジェクトの一つには、アジア開発銀行と欧州連合(EU)による支援で農業と水衛生を通じた栄養改善プロジェクトがある。これまでのフィールド調査から1年のある時期にビタミンやタンパク質など特定の栄養素にアクセスしにくくなる状況が分かったため、いつ、どんな作物を作って、栄養素を摂取すればいいかということを指導している。

### 現場を“点”で捉える

大事にしているのは「定期的にフィールドに行くこと」だ。受益者への営農指導を直接実施するのは地方の農業局やフィールドスタッフだが、マネジメントする側も現場を知らないと課題の本質をミスリードし解決策を考えてしまうこともある。勘違いしたまま支援を続けたら、それは支援者側の自己満足でしかない。協力隊の時はWFPマラウイ事務所で仕事をしたり、前職ではエチオピアやマリなどで農業支援に携わったり、これまでアフリカの国々も見てきた。多くの人は、ラオスはアフリカよ

りも発展しているという印象があると思うし、データで現れている事実もあるが、それでも実際にフィールドで、点で見るとそうではないこともある。実際は単純に比較できないことも多く、やはりそこはフィールドに足を運んで実際に目で見ることが重要だ。

また、文化的なことも直接現場に行って初めて気づくことがある。例えば、ラオスの一部の少数民族の間では妊産婦が肉を食べないという習慣がある。現地の文化・習慣はリスペクトすべきである一方、タンパク質不足に陥りやすくなる。そこで、肉に代わりタンパク質を摂取できる代替案を提案するか、健康のために肉を食べてもらうか、タンパク質が不足するとしても文化を尊重すべきか考えた。

絶対解がない中、豆類を食べることで解決したいと思っている。結果が出るまでにも時間がかかるし、粘り強く栄養について伝えていくことが重要だ。泥臭くても現場に足しげく通うことはこれからも国際協力の仕事をする上で欠かせない。

### 今の国際協力は応急処置

国際協力に関わり始めた大学生



フィールドワークで訪れたエチオピアの農村で現地の人々からおもてなしを受ける様子=本人提供